

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(66) 平成15年3月1日

中国の歴史書(その4)

『資治通鑑』(K083/67)

日光東照宮陽明門の一画に中国風の格好をした数人の子供たちが遊んでいる図が彫られています。今回紹介する『資治通鑑』の著者司馬光の幼少時のエピソード“温公の甕割”の一場面です。水が入った大がめに落ちた友人を助けるため石でかめを割り、「器は人命より軽し」と言ったというものです。

司馬光(1019~1086年)は北宋中期の政治家で歴史学者であった人です。死後、温国公を贈られ、略して温公と称されました。王安石の新法党に対する旧法党のリーダーとされ、北宋後半のいわゆる党争の端緒を開いた人物といえます。中国では長い間、科挙官僚の理想像とされていました。

『資治通鑑』は全294巻に及ぶ大著です。これはこの本が正史のような断代史ではなく通史であるからで、戦国時代初期(紀元前403年)から五代末期(959年)に至る1500年ほどの期間を扱っています。また、その著述のスタイルは「紀伝体」ではなく、年表のように年を追って事を記す「編年体」を採用しています。これは『春秋』など『史記』以前の歴史書がとるスタイルです。

初めは個人の著作として着手されましたが、すぐに国家の全面的支援を受けるようになり、19年の歳月をかけ完成しました。まだ出来上がらないうちから、北宋6代神宗皇帝より「天下の平治に資(たすけ)となり、古今を通じて鑑(かがみ)たる書」の意を表す『資治通鑑』の書名と御製の序文を賜るなど破格の扱いを受けています。

本書は、儒教道徳的価値観で貫かれており、国家の興亡や政治の成否はひとえに君臣の徳によるとし、あるべき君臣関係を事実によって追求しようとしています。史料は、正史はもちろん野史・小説の類まで利用しており、多数の文献から異同を考証し事実を厳選して史料的価値を高めています。正史以上に普及・重要視され、歴史を学ぶ拠り所とされました。

司馬遼太郎の『竜馬がゆく』の中にも、武市半平太が竜馬に『資治通鑑』を読むよう勧める場面がありましたが、日本へは南北朝時代には伝えられていたようで、特に江戸時代には広く読まれるようになりました。

当館所蔵のものは、和綴じ101冊のもので、沼津中学校の蔵書印が押されています。また司馬光が同時に書いた本書の年表と索引を兼ねる『資治通鑑目録』(K083/66)も所蔵しています。

(参考文献)

『資治通鑑 巻七 始皇帝下』

『王安石と司馬光』東一夫著(222.05/121)

『中国史研究入門』山根幸夫編(222/145)